

ル 4
3525
5



門 九
3525
卷 5

金田羅泰訪名所圖會卷之五

目録

- 安益川
- 城山の神社
- 菅公祈雨之古蹟
- 洞林院本堂
- 善女龍王祠
- 金堂 鐘樓
- 六條利官為義塔
- 相模坊の社
- 傾燈寺形の燈籠
- 靴ヶ岡
- 松山の館之古趾
- 延喜地藏
- 千躰堂
- 蔵王権現社
- 十王堂
- 鎮西八郎為朝塔
- 御供所
- 勅額門
- 甲智の御所之古趾
- 寶幢菴
- 鴨の神社
- 高屋天皇の社
- 諸神勸請塚
- 行者堂
- 鎮守辨天祠
- 御廟靈殿
- 時忠祈願之塔
- 同額面之圖
- 神谷の神社
- 白峯山
- 大師堂
- 馬ヶ嶽
- 崇徳天皇の陵
- 本地堂
- 西行腰掛石
- 玉章木

嘉十六年一月十一日寄
尾野貴英氏贈

本坊未院 地宮

茶堂 岡如井

大門

頼朝公之塔

朝千鳥毘沙門塚

兎ヶ嶽

為義為朝之圖

西行御廟と吊ふ圖

頭氏神符と裳むら圖

松山

松ヶ浦

松山の津

松ヶ浦の神社

松樹石

松石 磬石

網の浦

泊の磯

青海の浦

天皇烟の宮

吹雪谷

乃生寄

乃生の坂の林

名産五加皮茶

石蛤蜊

國分寺

金堂の古趾

大塔の古趾

大師堂

薬師堂

毘沙門堂

鐘樓茶堂

蓮池

霊樹の枯木

二王門 本坊

小太郎復讐の園

国分八幡宮

吉水茶堂

不動堂

足尾明神祠

根香寺

大師堂

本坊茶堂

二王門

香西の浦

金五ノ目ノ一

郷東川

重仁親王古塚

絃打山

薬王寺

遊糸の濱

鷺田の古城

権現の社



あやがわ
綾の川
あやがわあやがわ
安益の川阿野の川
又阿翁水綾水

も書河辺
加茂村とよと
はる故俗加茂
川とより

あやの
惣此の
あやの
安益郡
地名多一
鴨神社

名寄
雲霧うれぬ綾の川
鳴るる声
なりの方と知る
中宮内侍

加茂村

鞍ヶ岡 安益川の西向ふ四五丁許あり甲智の郷府中村とあり

甲智之御所之古趾 鞍ヶ岡より崇徳天皇林田の御所より移らせ給ひこゝ

崇徳天皇宮 鞍ヶ岡の山上あり社前ニ接橋の二樹あり

観音堂 十一面観世音を安置と天皇の宮の傍あり

宝幢菴 観音堂ニ並ぶ菴主観音堂おほい天皇の宮と守後と

新院讚岐の国ニ遷らせ給ひ林田の御所より寛文三年其後此鞍ヶ岡

御所を造り移し奉る則甲智の郷なるが故に甲智の御所といひ又国府の御所

といひ此所は甲智の郷なるが故に甲智の御所といひ又国府の御所

給ひて京師へ登りて其時の御製

濱千鳥の都へかへし身ハ松山ニ音とのぞねくと遊ばん平治

元年の春のち仁和寺の御室へ申させ給ひて五の宮より閑白の此由て申させ

金立ノ巻

給ふ殿下よりも申させ給ふ主上つゆの御のされもなきて彼御経と則ち

返りつらる親院此由と聞き口惜と哀る我朝も限らば天竺震且も国

論位と争ふ叔父甥謀殺を起し兄弟合戦とてん更むとてりもあはれ

我此支と悔思ひ悪心懺悔の爲に此経と書奉る所なり然る筆の跡が都に

かたが程の儀つらつらハ此経と魔道ニ回向し魔王とてり遺帳と茲

でんと大乘経の奥に誓状とて千尋の底に沈めり其後ハ御成をも刻し御

髪をも剥せり衣の御衣のそびる長頭巾と巻せり御姿をやつ悪念

あづらうも其頃都小川の侍従入道蓮如とて世と捨る上人の音ハ

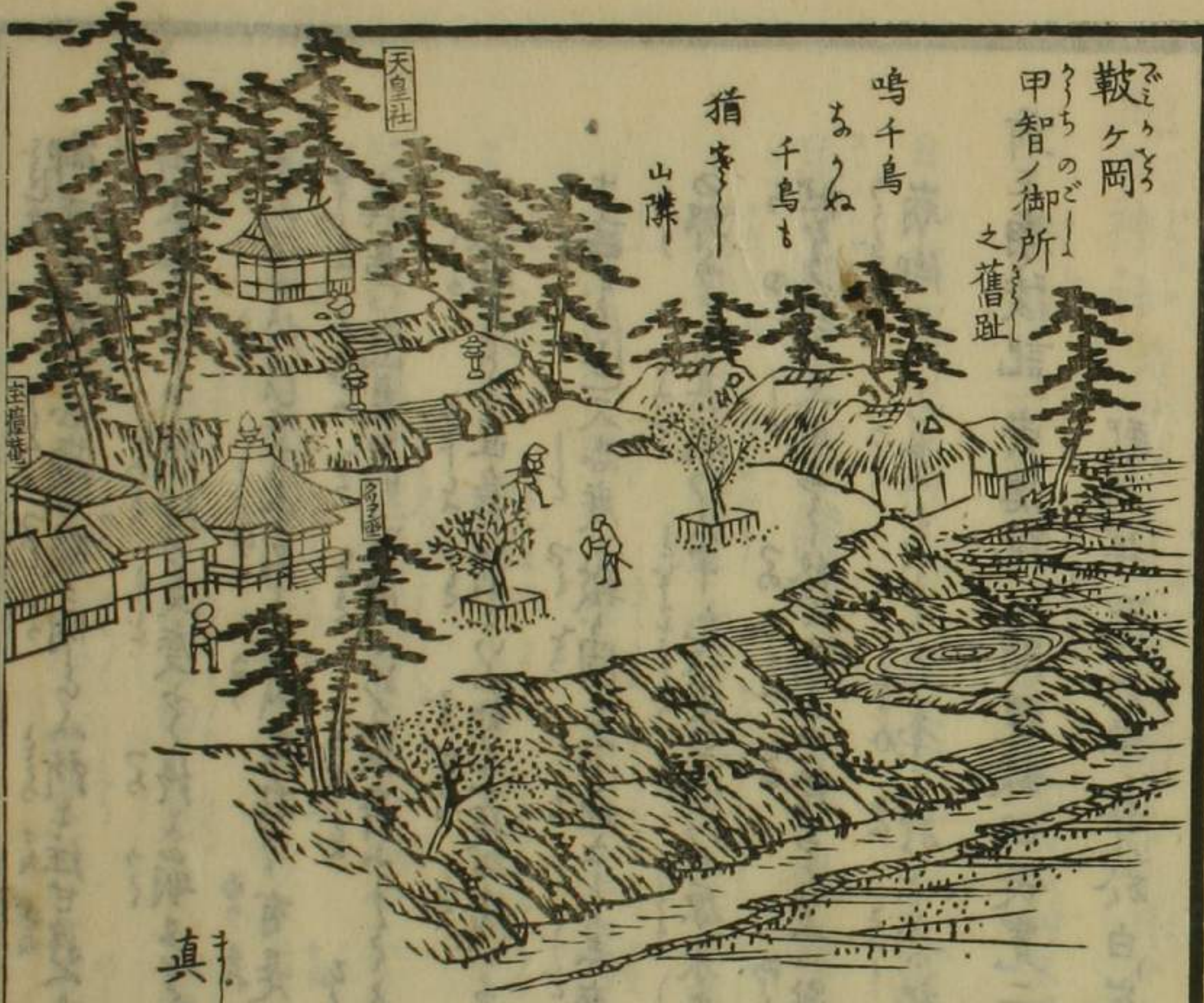
倍従り御神樂をみさし見奉る入すの許の人らればも敷奉

るさやもつらつ大と情と人なりれば只一人自ら及とてけり都と出

遣不讚岐の国下を御所のころに余所を立廻り入る目もあはれ

ぬ御ありとるなり如何なり内文斯と申いとやと志し深く伺ひられ守り
 奉る武士はけくともめくれは空しく其目も暮る折は月もは無りれは蓮如
 心と清しく笛と吹く終夜御所をめぐりたる不曉と黒くもる水干袴着と
 る人内より出より便をせとめり相も内へ入るふ柴の御所のとるなりと
 實ふいせと御住居かり蓮如涙いせむりかゝ有つ人々斯と申入りし
 ぶ院はじも意しと都の人々昔御説せしめられ猶も御前へもたれ
 けし思しやうんれ問をけりとも思ひ出ぬべし又斯る浅すれ良と入んて
 もけすくれは中くはなりとも只御涙とのとぞ涙させ多ひる彼男院は
 御々き如此この由と答へられ蓮如がもと一首の奇を録しけは涙をいと
 朝々もやあぬふ入る君もあつとせりて悪しと
 院御返歌あり

金五ノ二



朝倉やんぞつづつと飯をよ
 鉤とる所の音をのぞきおろし
 蓮如がふかふか思へし是を及
 入り込都を飯りる其後長
 寛二年八月廿六日御年四十六
 明とを給ふ明御の後讚
 岐院と申奉りし治承元年
 六月廿九日追号なりて崇徳
 院と申多る近世行る
 百人一首一話と又書ハ
 保元物語ふれるなり国司
 真島とつ所よ
 御所を造りしれいれよ
 うりて

御座々々又志度の敷岡より所住せ給へり中畧其後長安二年八月廿四日
 御年四十六歳猶岐の支度や終り山朝をせ給ひたり去り又支度より山寺
 へりし給ひても年々成るれば有是非なり
 真島八圓龜の向ふの海より孤島より入住地より八尺是は直島の標より
 匠造とて直島の前より如く一夜の舟がかり給ふとて御所を宮に
 支度くは又志度の敷岡とて地より志度より寒川郡敷岡とて阿野
 の郡より其隔つ事九八里の余り原未志度山寺もなるとて海辺の平
 地より改て支度や終り朝を給ふとて此の地を空言たり又八月廿四日
 前御の書と書されども白峯に於て祭祀執行す所は則廿六日なり
 前王廟陵記 崇徳院 紹運録曰長寛二年八月廿六日山朋平讚岐
 配所年四十六奉葬於白峯

城山神社 府中村より安益川の岸より十丁許をり菅公而祈り給ひしは神より

祭神 一座 神擲王 延喜式神名帳より出阿野郡三座之内なり

日本書紀曰景行天皇妃五十河媛生神擲皇子稻背入彦皇子其
 兄神擲皇子是讚岐国造之始祖也ト云々

則神擲王の八皇十二代景行天皇第十七の王子なり景行廿八年讚岐
 国山田郡の司となり下給ふ同郡屋島山に皇居凡国氏を君と王制を
 守るを承けし繁榮し王子の子孫國中に連綿たり

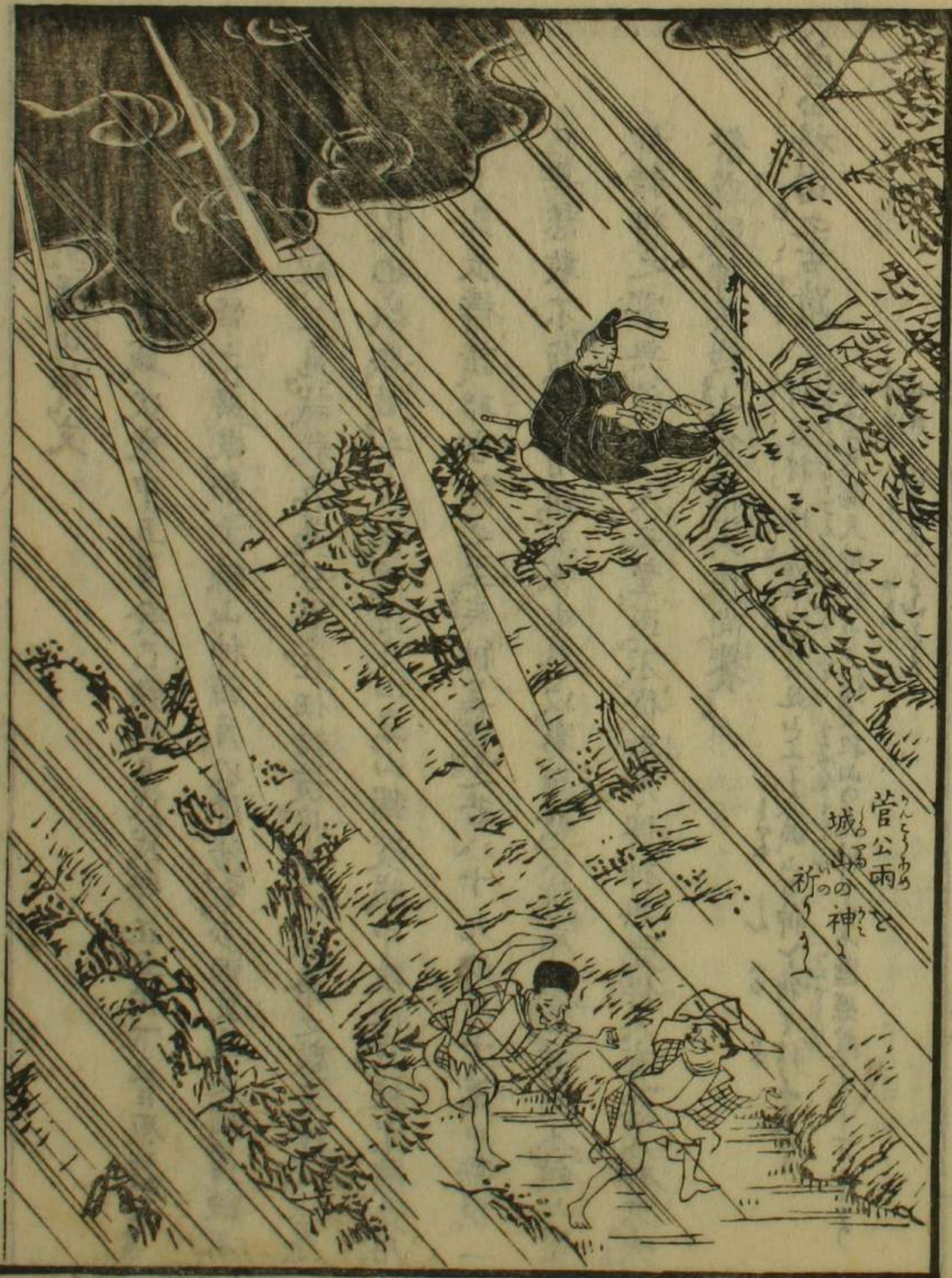
仁和二年正月菅公相道實四十二歳ふりて讚岐守に任ぜしと同日四月
 讚岐國を下り給ひ滝の宮村に官府ありて住せ給ふ然るに同四年の夏は
 雨ふりて此國にがら夏の初より旱しく一雨の涸れ給ふれば河川中の水も
 田畑も論諸の草木も悉く枝葉をたぎ居民は淋とて飢渴とて死に絶え

かひくらくとく麻は通行の人もく避途の旅余の途中鶴をみる事汝も尚
らとぬ事ども菅公此はと聞給ひ他の國の時雨あつと田畑を以て此國は雨
降ざる事我不徳に國を守る事と天の罰せむ所とんん斯多民と腦ん
是我罪なり然ともれ計ら所は天の君の勅と奉る此國を奉り
天納受はまごん一命と断せ給ひ仰と懇く多民の慈心と救を
給へて御身と淨めを給ひ當城の神小祭文を捧げ両宮を給ひ
不思然るも晴天忽ちと曇り雷四方小雲と遊光天は充滿と大雨類
降る病床に下れる者即時と極は田畑草木もくくはひ青くと
はり多民を懐ひ子の孫足の端どころとあはれ菅公の神徳と菅下勇
こころと此時の土俗はり今も毎年七月廿五日小坂山の神子向
うとく瀧宮の竜燈院を踊あり

菅公相の姓菅原名は道實字は三善善郷の御子母は伴氏なり兼和三年延
生し給ふ幼少より穎悟かしく父祖を慕はり壯に及んば文章自に
進々文章と屬し詩賦と作る貞和四年文章生し補せ給ふ益々官位進
んば右大臣より給ふ昌泰四年正月廿日祝紫太宰府に左遷す延喜
三年二月廿九日配所を放ち薨す五十五歳安楽す葬る
一條院正暦五年二月大政大臣正一位と贈給ふ

本朝文粹大江匡衡曰

天満自在天神或監梅於天下輔導一人或日月於天上
照臨万民就中文道大祖風月之本主也
松山館之古趾遍照院より五丁南の田の中より冊より小川あり橋よりこれと田井の
堂より此の字あり
此地は菅公當國の守護に任せりと下り給ひ一時在留し給ふ所の館也



遊_ニ晚春松山館

官_レ舎交_テ簷枕_ス海_一濼

轉_ニ接_テ危_レ石開_キ中_一道_ヲ

低_レ翅_ラ沙鷗朝_ノ落_ル暮

釣_レ歌漁_レ火非_ニ交_レ友_ニ

鴨神社 鴨のじま 安益川の東の岸加茂村より村中生土神なり 例祭八月廿四日

祭神 一座 賀茂皇太神宮 延喜式出阿野郡三座之内也

神谷神社 かみやのじん 白峯の麓神谷村より村中の生土神なり 右同神名帳に出

祭神 五座 春日大明神四座 五社明神と称す 荒神宮一座

三代實録曰貞観六年十月九日己未波國徒立佐下賀茂神神谷神等

並_ニ授_テ徒立佐上_ヲ

祭城山神文

維和四年歲次戊申五月癸巳朔六日戊戌守正五位下管原朝臣某
以酒果香幣之奠敬祭于城山神四月以降涉旬少雨吏民之困苗種不
田某忽解三龜試親五馬分憂在任結憤惟悲嗟辱命之數奇逢此愆序
政不良也感無微不至惟境內多山茲山獨峻城中數社茲社尤靈是用
吉日良辰禱請昭告誠之至矣神其察之若八十九鄉二十萬口無損一
口無愁敢不穎藻清明玉幣重疊以賽應驗以飾威接若甘澍不饒早雲
如結神之靈無所見人之望遂不從斯乃俾神無光俾人有怨人神共失
祭或疎神其裁之勿惜其祐尚饗

菅公祈雨之古蹟

神谷村より擯山より此山上より城山の神と祈り終りて
山上に天満天神社あり後々此山の天神より遍照院より十丁ござり
正南よりござり山なり

延喜地蔵 神谷村より白峯に登る道の傍より靈驗あり石佛あり

天皇社 白峯の藤高屋村より土俗血の宮より村中生土神あり

祭神一座 崇徳天皇 例祭九月十七日

長寛二年九月中旬天皇の金指と白峯に登り奉る時此地におり指中より
御鮮血より出され是に依て此所を宮と營ご血の宮と称し

例祭九月十七日執行す其御鮮血のより日なりと土人言傳あり

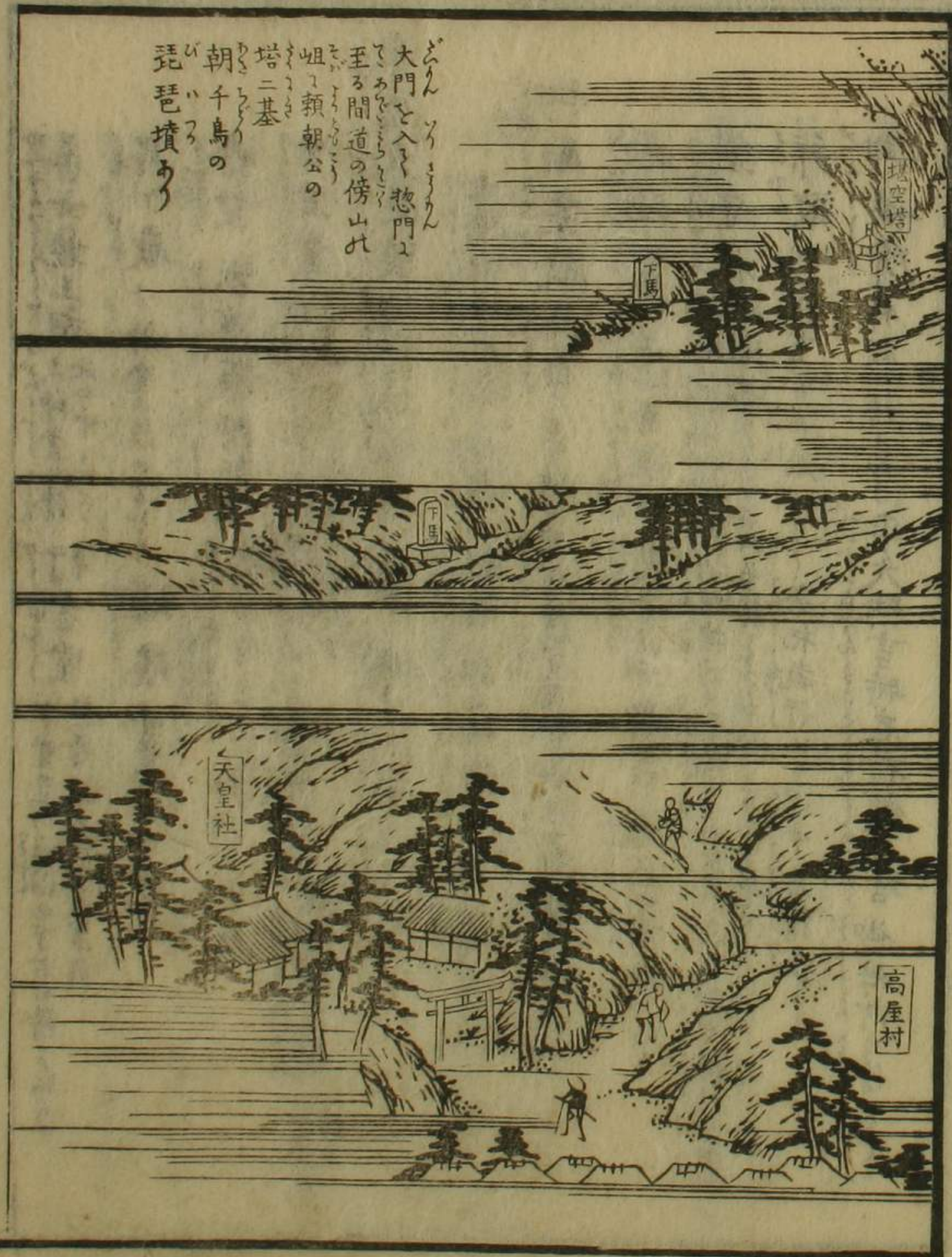
綾松山洞林院白峯寺 南有海村あり神谷高屋より兩道の登道あり天陽八十一

本尊 千手觀世音菩薩 智證大師作 立像長三尺三寸

千躰堂 阿彌陀如来 脇士 觀音勢至 弥勒千躰と女と 本堂の

諸神勸請塚 本堂の傍より 大師堂 弘法大師と女に本堂の左より

藏王権現社 山上より並み赤社許あり



金五ノ七

善女龍王祠 大師堂の傍 池の中あり 行者堂 本堂の前石階の下右の傍あり 後優婆塞と安置

馬ヶ嶽 千幹堂の後の方なり 鐘樓 金堂の向あり

金堂 本尊薬師如来 是日月光 弘法大師作

十王堂 登道の下左あり 木車地藏 善法港慶作 鎮守辨天祠 十王堂の右あり

宗徳天皇陵 白峯の半腹あり 茶毘奉りて葬り所なり

六條判官源為義塔 鎮西八郎為朝塔 御墓の前左右あり

御廟靈殿 御陵の左の傍に宮造と崇徳帝御自筆の御影と安ん

本地堂 十一面觀世音菩薩 春日作 本社の前左あり

鎮守社 同右と山主の天狗相模坊の影像と安置 其形境中鏡抵と世に傳

拜殿 例月廿六日 屏風ありて 祭祀執行りて 國中未清ま

御供所 拜殿の傍あり 平大納言時忠祈願之塔 御供所の傍あり

金土ノ八

櫻橘ノ西樹 拜殿の前左右あり

西行腰掛石 橘の樹の傍あり 石上西行の石像と坐り 長凡一尺五寸余坐像

石燈蓋 御供所の傍あり 玉つくり 其形推りて 世人これと頭燈と

額門 正面の門と云 額面頓燈寺之三字

後小松院御宸筆

同隨身 左源為義 右源為朝 木像 長凡三尺余坐像

王草木 門外の右の傍あり 擗の大樹あり 年毎に時々の王章と云 此木は

里俗傳云天皇此国に流すと給ひ 時郭との声と云を狂ひて 都の

と思へ出を頼りて 思へ給ひて 思へ給ひて

鳥を飼ふ 都を志のいふ 此里に 御装束なり

其御意と云のいふ 夫と云 言とおぼしめ 此より 奉れる

去りて 王章と此木の下に 時鳥の落文と云 奉りて 他跡

無中もろりなれん斯が故と有の此地へ限たり後世好事の者の附きの後ふん
 其是非ともいふをばも時鳥のこゝろ鳴りて明かり彼菅笠相の河原
 道明ちよわい鳴るをば別ともいふこの御縁より一々鶉のまよふは
 洗もはらひぬれぬ天皇の御変りぬれぬ有ん
 老年友人より手紙より一物も木葉の巻るものこゝろ余すをよかり
 過頂白峯よりし時里人よりし得しゆの被捧の葉の両をよ折る人の
 方より巻より恰も玉音のじ



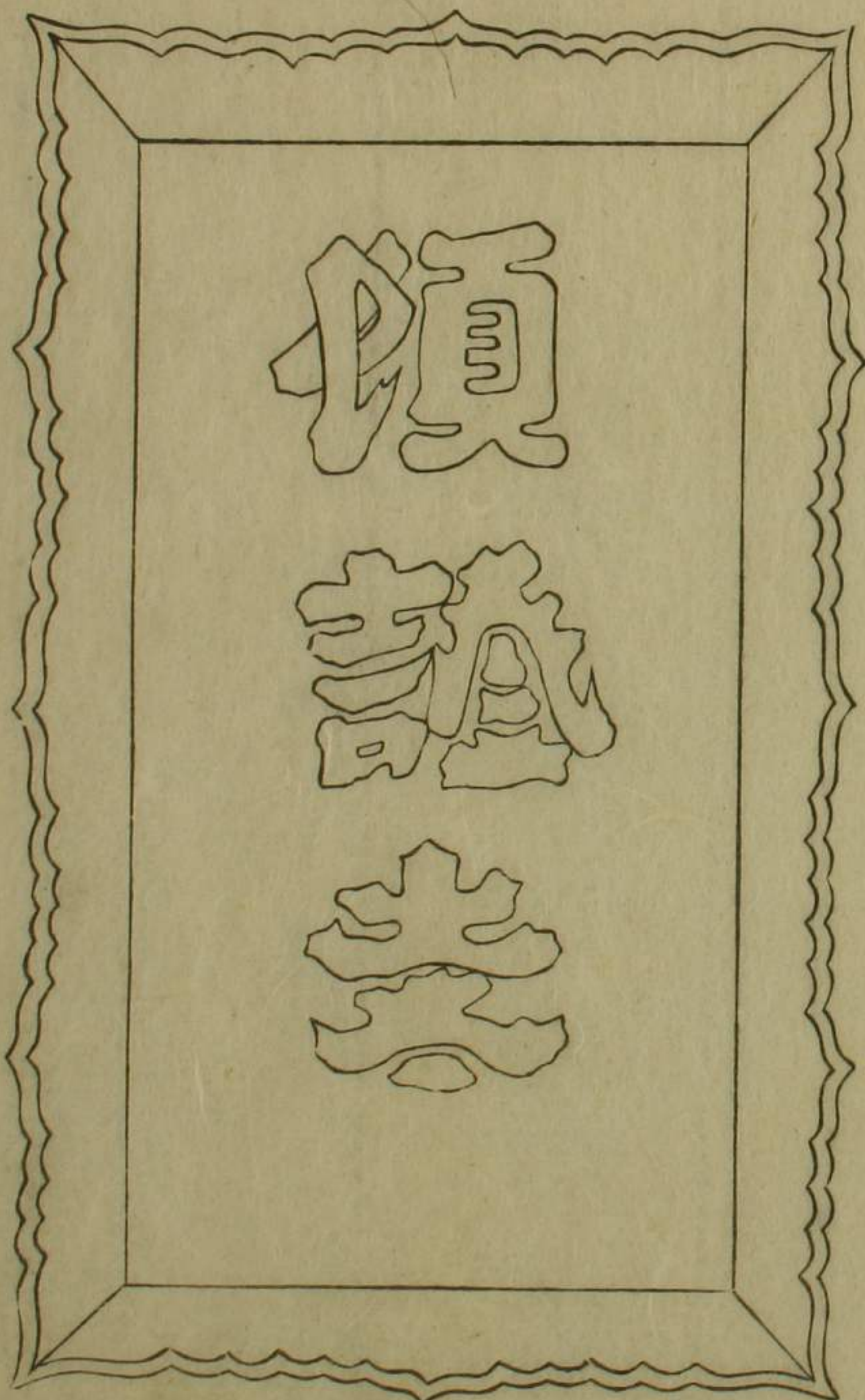
此のてく左に巻りくすこ
 右に巻りくすもあり

雄雄よりく左右のからりや其方とてい何すれ此得るは他
 の品類より其製密よりとま人の

本坊 十三堂の左 玄関方史客殿庫裡官庫宝藏唐門勅使門小祐構之
 末院 真藏院宝積院一乘坊 池之宮 宝積院の傍あり
 茶堂 惣門のちあり通後の後人 院伽井 根元より道右の傍あり
 願いよりよ寄るもあり

後小松院御宸筆勅額

御廟正面之御門ニ掲ル所





大門 惣門より三許西より神谷高屋の両道より登りて出會

右大将源頼朝公之塔 大門の内道の傍山の岨なり十三重の石の大塔二基一文化治年間

琵琶墳 頼朝公塔の右の山あり後醍醐院御奉迎あり朝千鳥と号し琵琶墳の星霜

朝千鳥琵琶之由来

抑此朝千鳥の琵琶といふ人王八十七代後嵯峨院當山御寄附せり

五種の靈寶の其二なり此琵琶と朝千鳥と号る縁由と尋ねる人王八十三代土

御門院と申奉る後鳥羽院の王子なり建久九年僅に御歳四歳にて即

位に給ふ此君常に琵琶を好ませ給ふより父上皇秘藏にせり所の琵琶

の三つ内より流泉の琵琶と名と譲り給ふが順徳院に御讓位の後

兼久三年御父後鳥羽上皇御謀叛より隠岐國に流され給ふ此時土

御門新院より土佐の國に遷され給ふが御秘藏の琵琶なる故に配所迄

持せり然るに御船幾内中國の海と經り當松が浦に着り院警固の武士と

石弓子小見ゆ高き山に松山あり在びやと命にけられ武士謹んで命

の如く則ち綾の松山より白峯山と号し崇徳天皇の御廟處なりと言はれど

院より御落渡まり彼御廟所へ御參籠じりてありあやせ出

されしにも武士等上聞を憚り後難と恐る許し奉らざりしに

御力に船中より御心なりの法施りせらば彼流泉の琵琶と号り出

場真操石象等の秘曲を弾り給ひしに不思議なるに磯集り數

多の子鳥たりし聲とて實に妙音に聞居る躰なり院もすんく

御意を清し流泉啄木揚真操の三曲と終夜たんと給ひる從ひ奉る

武士とて心も浦人も感入り聞居る斯く漸く夜も更て浦人

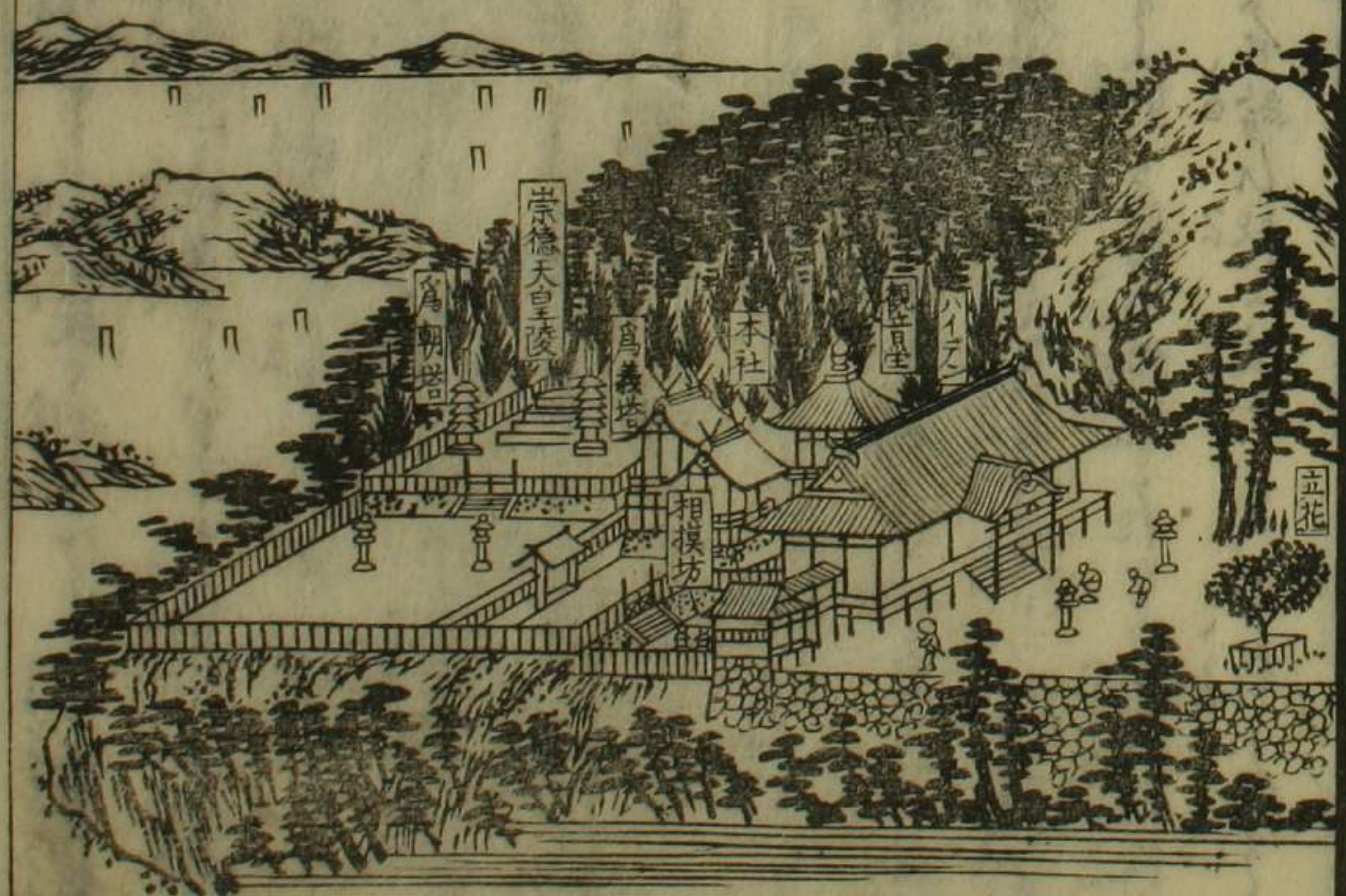
も退散し警固の武士も臥するに院は益々を退彼御廟所の方に

名留無見松丘下骨化為灰
 草澤中石上碑文消不見古
 人墳際淚生紅

君がまゝかきや
 いづもこが
 むらさきの
 ちりり
 ちりり

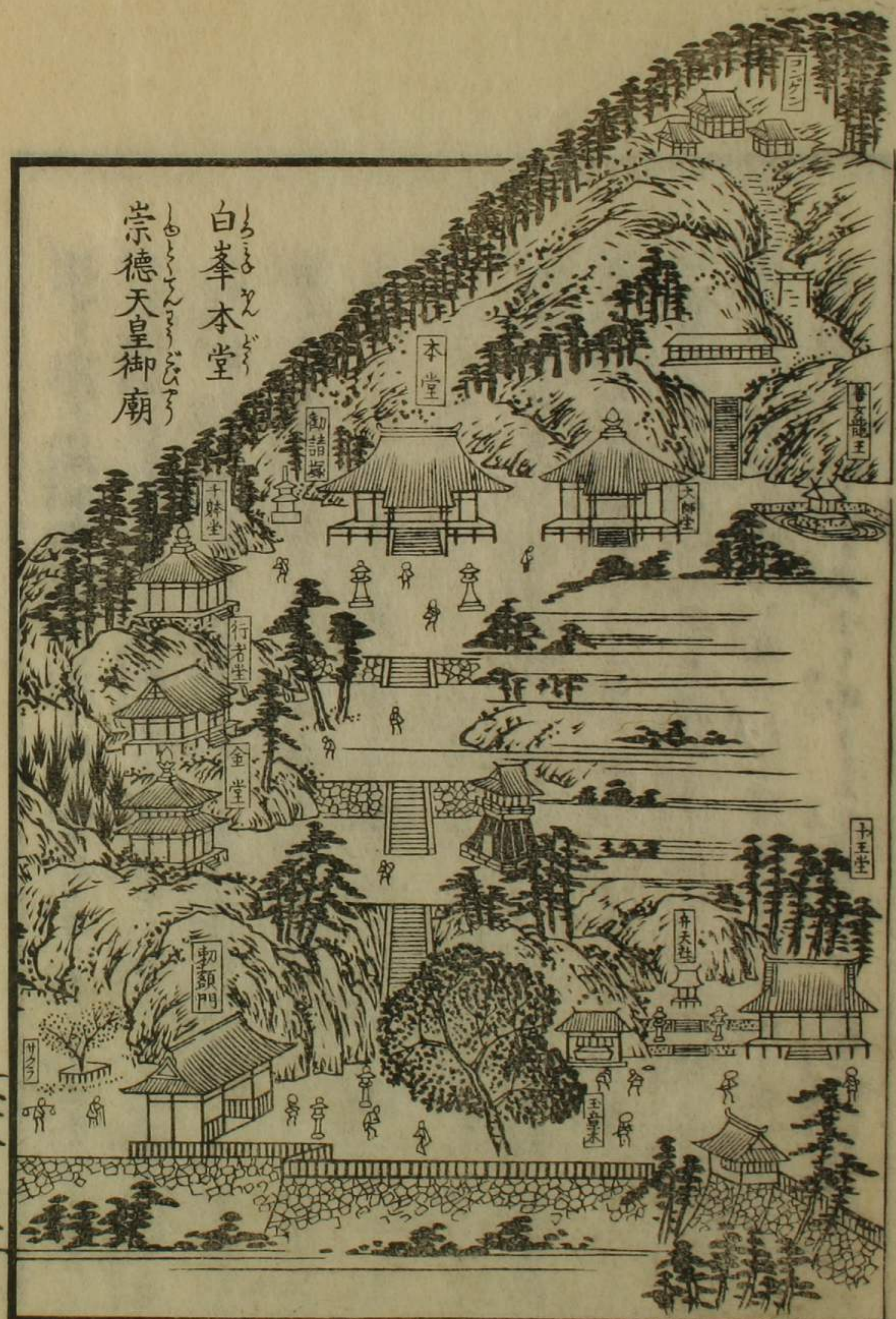
昔、為萬乘君
 今、為一丘土

馬ヶ嶽



白峯本堂
 宗徳天皇御廟

金五ノ十二



向ひ再び既洛の御変と祈らせ給ひまゝが既小夜も明さんとて頃不慮瞬
 主給ふ現ももわく松山の方より冷風とて吹来るといふく空中に崇徳天
 皇の御衣を給ひ朕流泉の秘曲と聞き歡喜せり必ら思ひ當る変はんと
 仰げらるると院御耳に入らぬ是に不思議やと空をらんらうと崇徳帝と
 左府頼長公判官爲義八郎爲朝とて保元の戦ひに七び一人の前
 後と守護しやぐ松山の方へ飛去る院はまろく悦ばせまひつと頼り
 く思召しらるる夜も己の明がとふふ時秘曲も感でし数子の衛一度り
 かのと立ちりる是より朝千鳥の琵琶と名づけ給ふれば神
 靈の告よせりて違は後堀河院四條院ホの二帝と経る土御門院ホ
 二の皇子邦仁親王御位に即せり則ち後嵯峨院とれなり土御門院
 土佐の國より後阿波の國から給ひ終に彼所よりいづも明とせり

斯る河國縁のるるなるより後嵯峨院御寄附ありとせらる

尚此余御奉納の四種とつり

一 唐本法華經 撰者終南山通宣律師

一 同二十八品和歌五十六首 則印板經之裏和歌二首宛 作者九八人の清書名目各之

一 青磁香爐 千鳥手 高サ六寸余 口徑七寸 せよふもの香爐と云

一 同花瓶一對 浮牡丹 高サ二尺五寸 口徑七寸

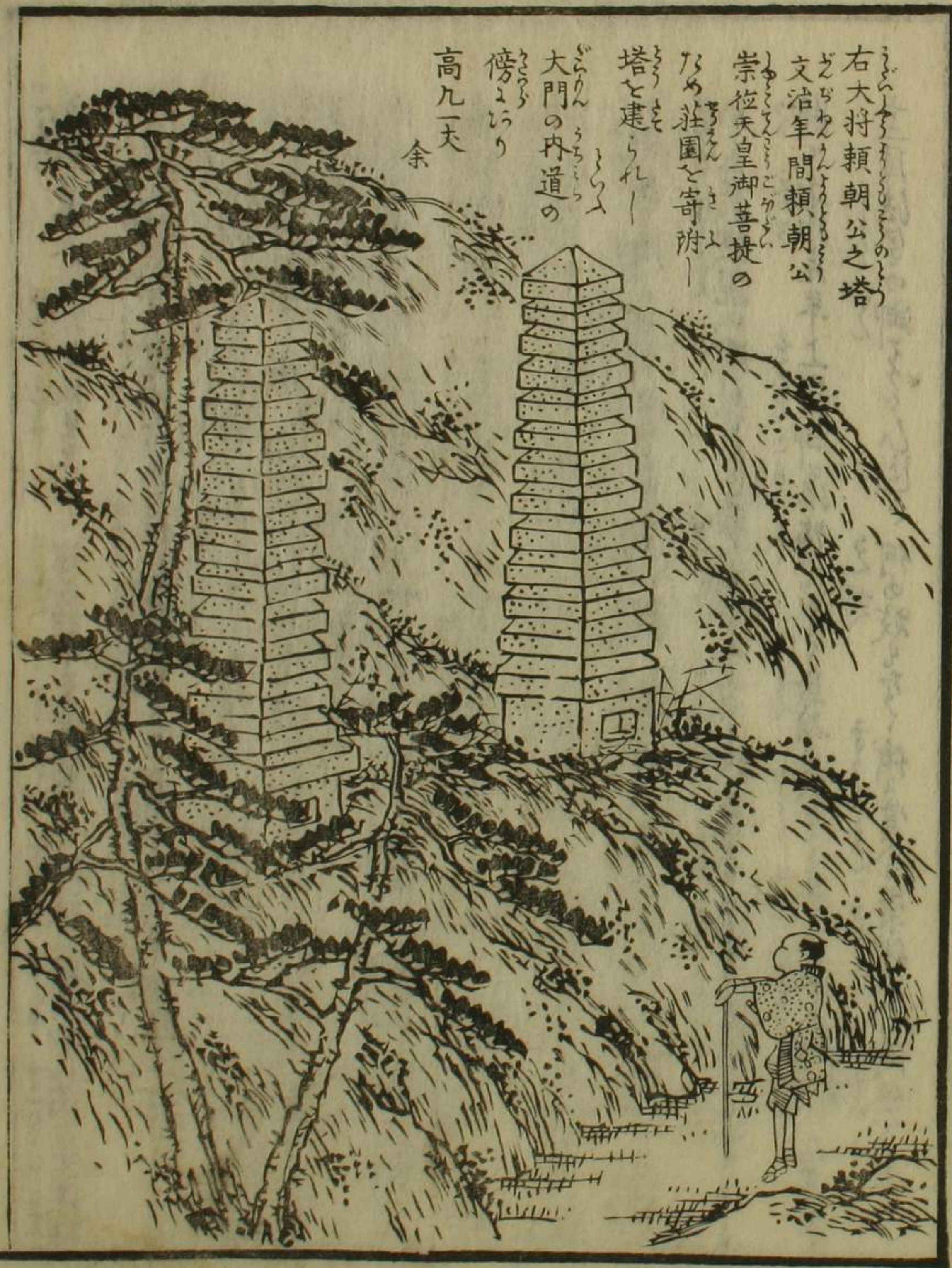
兎土嶽 境内の西の端ありて百余丈の山嶽なり傳云景行天皇の御宇此嶽より 一人の兎出現は是則横濱明神なりと云然れが日本武尊は八十八の水

とありて一時のまかりし傍に小堂あり不動明王と安置は麓と 青海村と号は嶽より流るる滝水とて流るる松浦に出る

當山は往昔弘法智澄西大師の建きなり弘法先此山に登り夢に室
 珠と埋み阿伽井とやりて修法と行ひて被室珠の地滝つがとなりて三方

小落く其水今増減なり智澄大師入唐皈相く金藏寺止住し通
 此山之瑞光ありとんひる希有の思ひに登山く伺ひ多祈ふ高山に
 法守相模坊老翁に沈り我れ此山擁護の靈神法輪弘通の聖者なり此
 地七佛法輪と轉ト慈尊入定の靈地なりと云く則山中と導き教相も
 二誘ひしる本尊と造區四十九院と草創し給ふ其後人皇七十五代崇徳
 保元年間當國に遷され給ふ松山の御所なりははらと三孫人教
 岡に六年承安九年に終つて明御まはら御遺詔より當山西北
 の山岳に於て茶毘當峯に葬り奉る近侍者より遠きを阿闍梨
 章實より僧国符敷が岡の御所と當寺に接し頓澄寺と号し御
 菩提に仰い奉るまはら御靈魂甚しくましく奇瑞帝都にか
 うやき御恨と深くれば御代に聖主世の武將も思はわが奉つり





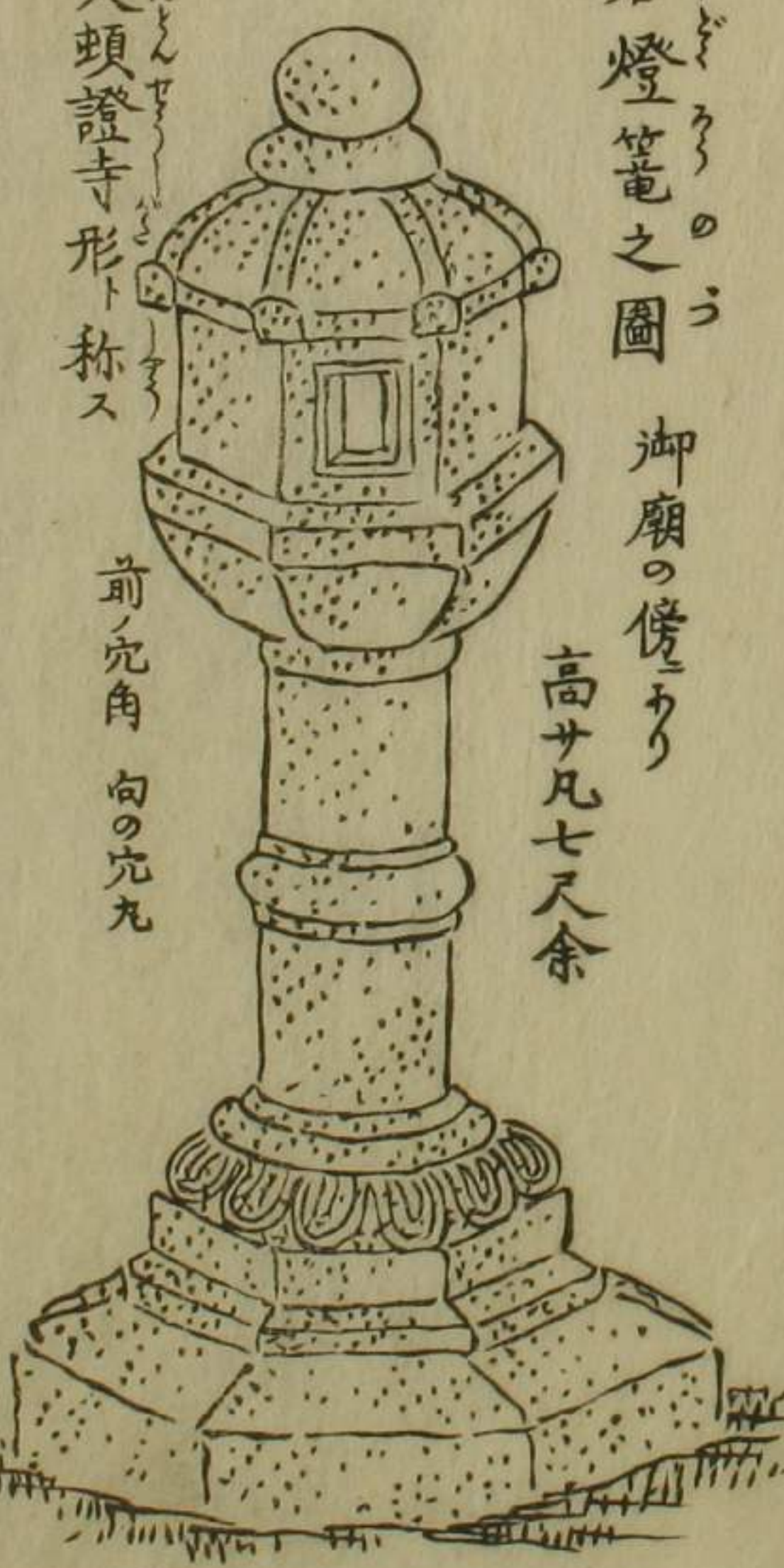
右大将頼朝公之塔
 文治年間頼朝公
 崇徳天皇御菩提の
 乃々莊園に寄附
 塔と建られ
 大門の内道の
 傍より
 高九一丈
 余

御府莊園と寄る御菩提と吊ひ十二時不斯の三昧漬経所と當山と
 論旨陰宣と成下されてこれと行ひ或は法樂北奇種との捧げ物との看め
 奉り給ふ始り積後院と申奉りか法兼元亨六月廿九日追号ありて崇徳
 院と申奉る其後漸く御天威と恐と社禮と嚴小宗教とむふ今のまゝ海
 河内の西郷に法兼と寄らる新北山の新庄に文治年中頼朝公の寄附あり
 一崇徳天皇御宸筆尊顯 御殿納る處一同 弥勒名号 良慈親王御裏書 御判有
 一同 御自愛筆 一管 一崇徳天皇御感得佛舍利二探 青白
 一同 御影 一幅 二品幸仁親王御筆 一同 御影 爲義像 爲初像 三幅 長慶筆
 一同 尊号 一幅 増伴筆 今尚存一宝庫に藏ム
 抑崇徳院と申八人五十二代の帝はく鳥羽院第一の皇子之御禪の頭仁御
 母の中宮藤原の璋子待賢門院と号し 大納言藤原公實が娘なりしと
 白河の法皇御息いとて内ありて后と云はる

元永二年五月頭仁誕生すりく保安四年の春五歳と御位に即せ給ふ圓白忠道攝
 政より此時天皇の曾祖白河の法皇存生すり院中より於て政務と執せしむ
 是と本院より鳥羽院と大上皇より又新院と申す
 大治四年七月七日白川
 法皇崩御年七十七
 此法皇在位の時より自ら政務と執行の位と譲りまはし後堀川鳥羽二帝より當
 宗徳帝より院中より政務と執せしむ
 白河法皇崩御の後鳥羽上皇憚らせ給ふ所より前関白忠實が女奉り八月
 高陽院と申し又太孫藤原の長實を娘得しと云く女御より美福門院と申
 御寵愛深きに終りに政務も意せ給ふと云く然る小保延五年美福門院
 の御後御子誕生すり是と體仁君と申す上皇御位に譲り給ふ
 今上崇徳院の御孫に給ひ割り上皇御寵愛の余り東宮と定め給ふ
 斯て永治元年上皇御落飾りより鳥羽の法皇と号し奉る
 時治年 又其年
 十二月法皇の御位に給ふ何の故もなき俄に當今崇徳院の御位に譲り

金五ノ十六

古作石燈籠之圖



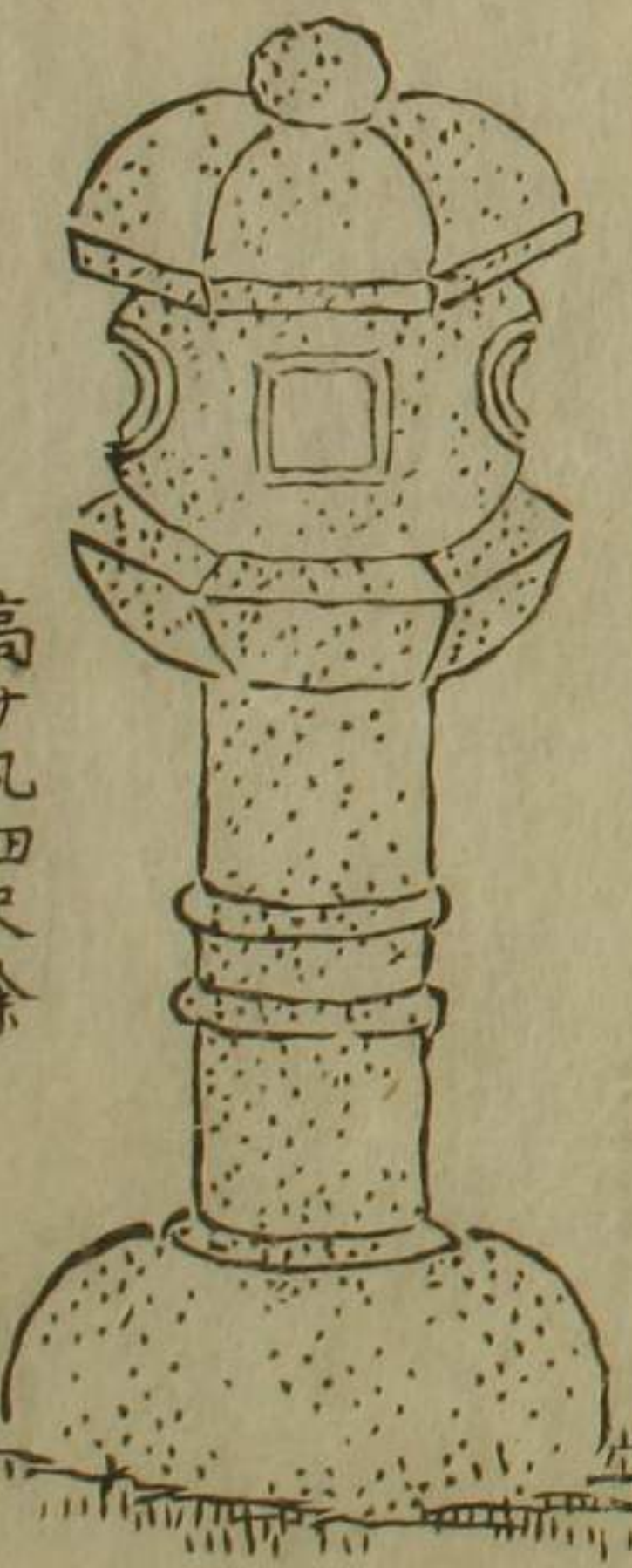
御廟の傍あり 高サ凡七尺余

世人頓證寺形ト稱ス

前ノ穴角 向ノ穴丸

同

西行腰懸石の傍ニあり



高サ凡四尺余

崇徳院の御在位十八年と云ふは、幼少に御即位せ給ふ故、今年より元二、御在位と云ふ給ふ是より鳥羽法皇と云流と申、崇徳上皇と云流と申、改勢の御在位と云流と申、新流の何れ構を給ふ有らむ如くは、是より御中諸、夏不卒に、年月を送り給ふ、久壽二年七月、當今近衛院十七歳、御崩、給ひ、御在位、全く崇徳の院の御長子、重仁親王、御渡らせ給ふ、是より、法皇の御在位、いと法皇、第四の御子、推仁と云流、御在位、是則、後白河院より、是待賢門院の御後、され、新流、御同後、余より、御在位、美福門院の幼きより、養ひ、立、申、給、近衛院の、美福門院の、入老、斯、か、ど、入、申、合、れ、孫、新流の御根、も、深、か、り、去、程、に、此、年、保元と改元、あり、七月、鳥羽の法皇、五十四歳、に、崩、御、あり、

金五ノ十七

當今新院の御中、日々、漆、謔、朝暮、御心、より、夏、の、看、る、近習の人々、面々、辛、夏、も、多、り、終、御、謀、叛、思、は、是、新院、白河の御所、御幸、味、方、召、給、治、左、大臣、頼、長、関、白、忠、通、不、和、此、度、の、密、謀、の、頭、直、地、泰、候、六、條、判、官、爲、義、平、右、馬、助、忠、政、召、應、白、河、泰、爲、義、子、息、小、義、朝、一、人、の、外、皆、新、院、の、御、方、中、鎮、西、八、郎、爲、朝、強、ろ、の、精、兵、古、今、無、双、の、勇、士、内、裏、関、白、忠、道、以、下、始、武、士、下、野、守、源、義、朝、安、藝、守、平、清、盛、末、泰、候、守、護、奉、既、保、元、元、年、七、月、十、日、の、卯、の、討、合、戦、に、昨、夜、鎮、西、八、郎、内、裏、夜、討、と、言、上、左、府、頼、長、と、用、い、ら、は、却、官、軍、寄、来、兩、軍、龍、虎、の、勢、い、は、は、戦、を、討、死、の、女、龍、爲、朝、矢、射、倒、る、数、を、と、ん、然、も、官、軍、多、勢、終、新、院、の、軍、敗、左、大、臣、頼、長、流、矢、に、

羅山集

源為朝

為朝為義八男也
 替刀絕人獲臂善射
 為義責其剛傲逐之
 鎮西故去鎮西八郎
 為朝居豐後國欲兼領
 九國九國人不肯從
 各築城以拒之為朝
 大戰二十餘回拔城數十餘
 壁三年之間九州皆入乎
 裏有稱惣追補使時
 為朝年僅十五其後保
 元之難與為義同奉

六條判官為義



金五ノ十八

崇德上皇之命

義朝之兵大戰既
 而克敗兄弟多死
 為朝逃竄而後邊
 然被捕謫伊豆
 大島為朝押
 領諸島不輸
 官祖嘉應之
 年狩野茂光奉敕
 往攻之為朝放矢一船
 覆而兵士沒死官兵
 辟易不敢近焉為朝
 慮連勅之罪而自殺
 非方盡而死也壯勇氣
 弓矢之勁日本古未
 無出其右者

鎮西八郎為朝



中つゝ死しん新院しんいん落おちを給たまひし御室ごむろの知足院ちそくいんの僧坊そうぼうより落飾おちしやくしたすし
出家しゅけの形かたちなりせし御戒ごかいの師し仁和寺にんげじの寛遍くわんぺん法務ほふむの任坊にんぼう御寄宿ごきじやくなりし
御製ごせいよしのきや身みを深雪ふかゆきなりしとて心こころのせし伊呂波いろはの

夏なつのまゝらひ程ほどは志こころざしふとて覺おぼえし夢ゆめの心こころ花はなをそとれ

同廿三日どうにじふさんびつ讚岐國さんせき遷うつ奉ほうるべきに宣下せんげせし斯しかく八月三日はつがつさんびつ讚岐國さんせきつせき

是これより林田はやしだの御所ごしよ三年さんねんまじりて裁さいが岡おか六年ろくにんまじりて終はつつ
崩たふせしさい當山たうざんに葬まうり奉ほうるや前まへ著あきせはれと累かさねス

山家集

新院しんいんのわさ小こおとほしき便べんおけし女に房ぼうの

水みづのうらみ流ながるふちぎたさしやわらひ涙なみだをまらし

あはれ遠とほくわらふ心こころひびきうらみとくはせ水みづのうらみ
西行

いふくく憂うれふけても彩いろむさ契ちぎり道みちのまづぶら

かまきり涙なみだをまづひき方かたのうらみ君きみのうらみ又また修しゆらうらん

頼たのむらんあはれいひやひらうよの別わかれもはよそらん 西行

古今ここん著聞集しやくもんしゆ新院しんいん和歌わかの道みちを務つとむせ給たまひしわらう要事ようじ出来きりされこれ
道みちも廢ふせぬやと悲かなしき西行さいぎやう法師ほふしより舞ま舞ま法師ほふしかへし編あつ

言ことひみちのあけ絶たぬ折をり有あら身みを悲かなしけれ 西行

敷しきき山やまやなえぬ道みちもなれくも君きみのうらみを涙なみだとまのめ 兼念

山家集さんけしゆのわさよまじりてね山やまの中なか西さい流りゅうふりまけむ

ね山の波なみふながとく舟ふねのやうなれ 西行

ね山の波なみのうらみかまきり君きみのうらみ 今

一書ひととみの西行さいぎやう法師ほふしね山の諸しよを度たくとの橋はしのすまをけし法ほふ施せし時とき
御廟ごぼ鳴動なるどうしね山の波なみを流ながる舟ふねの心こころは廟ぼの中なかよりはしり

西行撰集抄去新院の御墓所と拜奉りんも白峯と云ふ所尋常侍りし松の二村
 志がとて迎りてとてねと仕廻り是る御墓と云ふ冷更かたうとて
 物も多々ばあわらう人奉り奉りて清涼紫雲の岡とて一好ん
 百官といつらとてせ後宮後房のてふわの三千の美翠のかんじりやや
 御まろどまわらんものゝを移しとて巨万持のすけりてとて学はせ
 のゝはく春の夜を専ら行の奥つまを侍りて置りひまや
 今かゝていかにてもとてや他國きよの山中のむら下の下は朽たす
 とい貝種の声もせ法華三昧はむる僧一人もたれ松の松の松の
 きのとて鳥も翔らぬ有るを奉りて源とて一よりとて始り
 い終りわらひ侍りてとて未だかる何とて侍り侍りてとてい
 此世たり一天の君万意の主も命の如くの苦とてとてま一返り侍り終り



金五ノ九ノ九

判利もいよかかみん宮も葉屋もいれそいりあかれば高位もかきこ
みらふ守我おもさ度う波國王ともかり終いせんかれも臨幸即忘りて於て
多人侍らば只行りてより果て佛果を満の位のまぎを座しく侍りてふも角も
思ひつくるまゝと潤のまぎと出侍りてふ

よしや君むりこれの座ともかかん後い何よりか
とやまかんとしとく侍りて盛衰い今始りぬとされも跡を心算りれぬと
侍りて此前文に仁安の頃西園とて侍り仕り侍りて次は後醍醐天皇の御
つし座ともかかん任りきとあり山家集の下に仁安二年十月末とあり
よし新院崩御長考二年より四年後の事なりとあり任りて出んとせ
程は御纂の緒より由かれに仁安三年のころなり又水菫の岡と菴と法
つし此の再び西園侍りのゆゑなり治承二年のころなり十二年後のこと

金五ノ三十一

新院崩御のゆゑは後醍醐天皇と申奉りて治承元年六月廿九日追号あり
崇徳院とて申奉りて御霊と慰め奉りて此のころは御憤りの故なり
少弐貞重十一月平相国清盛朝家と恨奉りて後白河法皇と鳥羽の離宮
押と奉りて松殿関白基房と備前法皇と太政大臣師長と尾張法皇と余
按察大納言源資方及び月御雲客四十三人の官爵とてつり誓居せしむ
是は重なりて當りて崇徳院の御崇りたりと申されば後にも御美とて
め奉らんとしとく元暦元年正月後白河帝の勅よりて春日の末北河
原の東に御廟とて遠宮せしむとあり

大平記卅二巻と云

故細川隆興守顯氏の子息式部太史繁成と伊豫守とほりて九國の大將と
と下されば母もつ後醍醐天皇とて兵部と備前軍勢と集むるゆゑに延文四年六月



月二日俄に病付く物ねいかりりるが自らほくそく我崇徳院の所依
 を落し軍勢の兵糧の料所を先行し依り重病をまより天の護八雲
 早の毛孔より五箇六箇の余る間凍り風より盛んを火の如く冷やり
 なる水と聲も佛之湯のじり暑や凍りや足助も思ふと怒りし時
 びく岡谷解社しこれに医師法湯河看病の者より近付んとし停り
 四方の中へ猛火の燃んは燃る程熱く更し近付人も暑より病付て七日
 止當りたる卯の村に黄なる旗一旗し混胃の兵千餘を三方より岡谷に懸
 波とわがく押寄り難とらるるに敵とせし心持此岡谷に集る兵も又
 百餘人を展は走出く散り射る前種つる物とるのし追つて
 半時をりて戦ひたるが揚もより寄る敵も久く紅の母をける者十餘
 騎大将細川伊豫守が首と家人行吉掃部助が首とを取らりしなり

貫と悪し思ふ者と皆打らるるは是看や兵もよく二ツの首とて以て
に此大手の敵七百余騎勝ぎて三声とて作つて飯をくれ此奇は天
上を雲に乗じて白峯の方へ飛ぶる変化の兵飯りされ是を防ぎつ
者も討たぬとてへつ人も死に手負とてつても悪はふいなる不思議
ごとと互に語り互に問いて暫くは伊豫守も行吉も同時墓なく
成りて誠と不思議なる夏ぶなりき 神靈の新たりる支斯のこ

一 松山百首和奇并追哥三十首一軸

頓證寺法樂 飛鳥井宋雅卿筆

右百首并 同三十首内 正三位公種
あがびん 本末の色は白峯の雲とておれとれのとて 九條植通公

一 勅額并右兩種之漆状

一通 飛鳥井殿より富小路殿、
一通 富小路殿より富山院主、

一 和歌三十首

九條植通公富山御恭詣御自詠自筆則與書有之

一 鎮西八郎為朝矢一手

尚高僧知識の作佛御宸筆類經卷款集お辨多有之とてより夏秋を在畧之

一 白峯縁起 一卷

少允言の道常宗化世寺行俊卿清書

右の内倫者ホノ父多有之亦

右外段白峯縁起と雖有之富寺の禅侶と俗姓之高卑と縁せ凡御

相り可準之由院宣と給ふと有之故世人乞と承宣者ト云

一 源氏物語 五十一帖

烏丸光廣御筆外類大吹門徑名卿筆

右の内類之巻終矢しく足せり乞何人との事希き也と去りて
然る不安永奉同東衣の浪士大河内軍物とて人知款と好く善以或
時市中の骨董店とて須之巻と求む事と後此國へ行御一平
き山と緒で此由と縁ありこれとゆえせらるる右不足の品と返る人衆人壽

異の思ひとらん南海より物実集り標ひ和奇者源のち小つり
自ら本之般と事まじく神の導くせ給ふ祈ちりて別ち奉納せり
我々寺僧の物語あり史筆のついでと云ふ紀と
又天文中制札二枚

禁制

白峯寺

一軍勢甲乙人監妨狼藉之事 一伐採山林竹木事
一寺領中陣所其外申懸非分之儀事

右々條々堅新令制禁也若於違犯軍者可起嚴科者也

仍下知如件

天文八年十月六日

讃岐守源朝臣判

右細川後守持隆の事なり

南海治札記曰天文八年己亥秋細川晴元阿讃の諸將小命とて録州

河野と追討す心中畧細川晴元より大内義隆と膠合し西家より豫及攻
心即河波屋形細川頼俊守持隆と軍將とて阿波讃の兵二万餘人
海陸二路に分つて豫及より向人陸兵後及後北條に到つて勢拵とて
此地に崇徳院の御廟鎮かたに深く敬し軍津と嚴重に云々
右延文三年任保守誓氏由徳と掠りて神罰と蒙りて支つてより後及
持隆嚴に丸妨狼藉と禁止し制札と出さるなり

禁制

白峯

一軍勢甲乙人亂妨狼藉之事 一伐採山林竹木事
付り放火之事 一相懸寄宿多兵糧等事

右條々當手之輩令停止若於違犯者速可被處

嚴科者也仍依仰下知如件

天文八十月日

彦次郎之相判

彦次郎ハ三好家の通稱トシテ是則三好實休也

後豊前守義賢を号し右制礼子前字は細川の制礼ホ

今存一々富山の什物ト云

今有ハ神靈の掲書事ハ今更ニ言フハ鉢更四國霊場の札所ヲ以テ山嶺
の峻路といハズ凡テ諸人オシテ運ぶ事寒暑陰晴の差別ナク日毎ニ登山
スル事間ひは原来此地ハ松山ト号ケ古キ教も縁ト云ル所ナリ
四面ニ列ル浦里より山路川辺ニツケテ石ニツケテ古跡ヲ多ク其
大門の外下乗の傍より眺望殊ニ美シ東嶺第一の風景ナリ
松山 古山ト云フ安益郡ニ在リ故ニ後ハ松山ト云フ此山ハ号スルナリ
松山の津松山の湖堂あり山下の田の面ハ松山の田井ト号スルナリ
新古今 ちかづいてハ松山君ハ松山ト号スル門トセテ今ハ年々二條院續俊

金五ノ卅五

松ヶ浦

松山の禁の浦と云 松山の津 同上

後拾遺

松山の松の浦風吹トセを志シテハ一ノ志見 中納言定頼

一書 志見の古奇貝の面ニ文まじりト云ト又赤と鳥居形ト云ト其是非

と云テ亦今少ト云

松ヶ浦神社

同所あり伊弉諾伊弉冊の二神ト勅請ル當社の神主富家淡路ト云フ
半依左大臣頼長との長子師長の後継ナリ師長保元の始主依國ハ源流セシ
志シテ新流ト慕ヒ奉リ此國ニ奉リ奉仕ル頼院前師の後継者ナリ
妙音院関白ト稱シ其樹ニシテ富家ト号スル此姓ハ頼長との父君忠實
公富家ト号リ給フナリ是ト稱シ今ハハ血縁連綿ナリト云

松樹石

松ヶ浦より出ル 松石 雲根志曰勢及宇治成頼寺奇石ト云ハ明和三年六月
鐘成蔵ハ 鐘石松浦ト号スルナリ自ら松石ト号スルニハ松樹石

又江石石亭の浮藏ト云所ハ松ヶ浦のカナ本ト云あり其餘名石ト云ハ以浦ト云

磬石

白峯の山中より出ル色青ク思ハ是ト云其音金の正僧衣ト云テ待ク石磬ト

細之浦 松ヶ浦の向ニあり

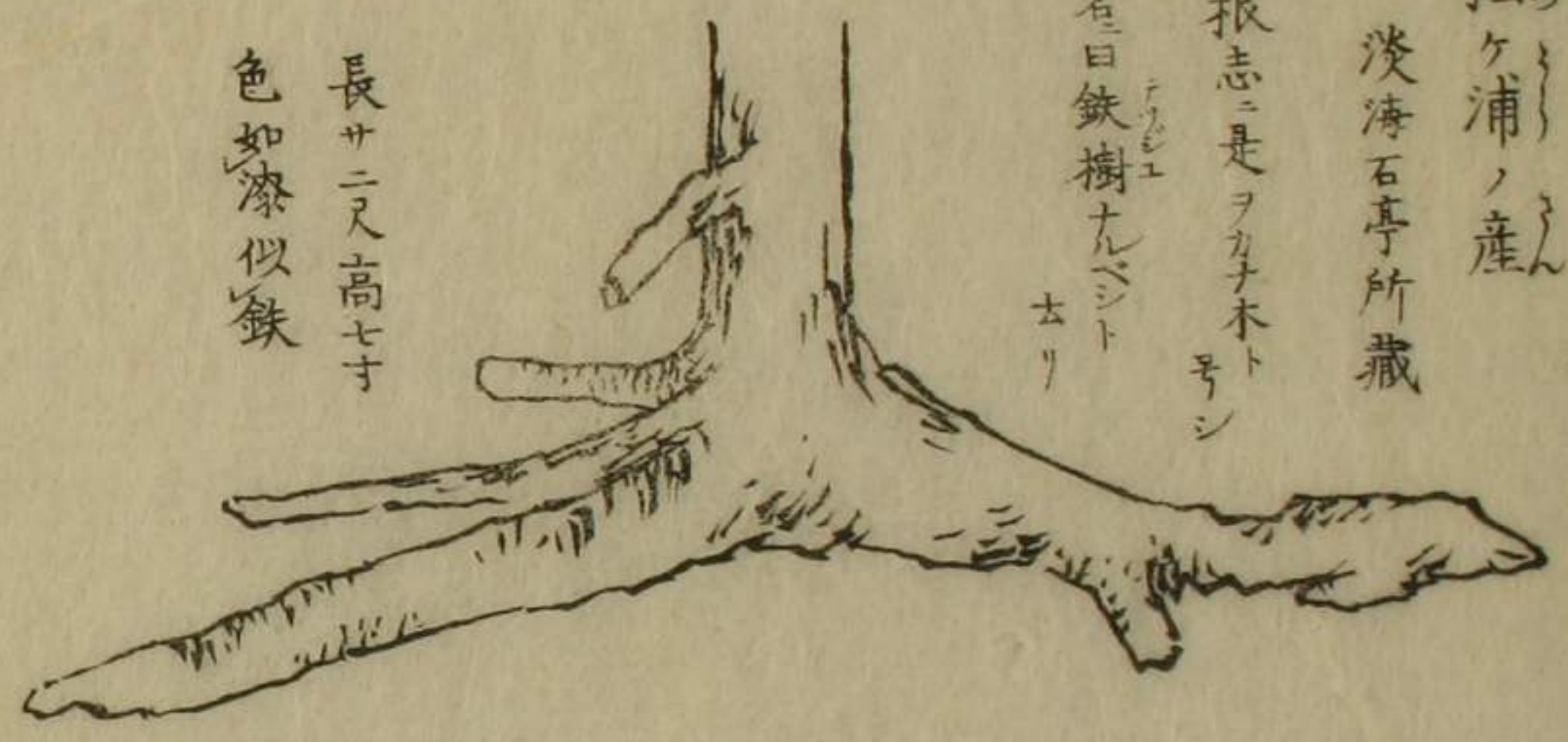
松ヶ浦ノ産

淡海石亭所藏

雲根志ニ是ヲカナホト

漢名曰鉄樹ナリ

長サ二尺高七寸
色如漆似鉄



同浦之産

松樹石

色赤黒

石面松ノ枝ノ如シ

目方至テ重シ

鉄樹トモ古ベテ覺ユ

長サ七寸余
四九二寸五分

曉鐘成

町藏

白峯佳住子ヨリ

得ル所ナリ



金土ノ卅六

新勅撰 浪風 長系 乃代のまふりて綱の浦人まね日びをま 正三位家隆

萬葉 霞立長春日乃晚家流和豆肝之良受村肝乃軍王

心平痛見奴要子鳥ト歎居者珠手次懸乃宜

久遠神吾大王乃行幸能山越風乃獨座吾衣

半爾朝夕爾還比奴禮婆大夫登念有我母草

枕客爾之有者思遣鶴寸乎白上綱能浦之海

處女等之燒塩乃念曾所燒吾下情

泊の磯 細ノ浦ニ隣ル

細ノ浦ノ磯と云ふものと名もさきかへし浪うみ從三位行能

青海ノ浦 白峯の麓青海村の海辺なり

南海治乱紀云ふの事ありす 吾川氏部少輔ハ數代の居城を明授て家人從類ハ白峯の御領有

海浦（引取）其身（徒兵）千人を具（松浦）到（塔陀）の廣島を渡ると云々

天皇ノ社（白峯）の麓（青海村）より土人（烟）の宮と天皇の玉座（白峯）より葉昆（奉）時其烟と云々

祭神 一座 崇徳天皇 例祭 九月十日 則宗昆（奉）日と云々

吹雪谷（今泉）の谷より白峯より高松（出）街（右）より寺より凡（十四）丁（并）并東之

乃生崎（白峯）の北の麓（松浦）の東より乃生村の溪より海岸と乃生の郷と云々

西行撰集抄云過（一）仁安のころ西國（ろく）彼（は）は待（じ）次（つ）續（及）みと云々

林（と）下（ま）皆（は）く住（す）りき深山（辺）のたりの葉（ま）く庵（後）びてつま本（と）た山

中の氣（ま）のまどくよなる風（は）とて入（り）て喚（き）きを遠（の）の勢（は）待（み）る

うづとつ事（は）長（た）の曉（ま）く様（の）と云々と聞（か）く腸（と）と待（み）る

栖（い）後の世（の）もしも侍（り）し心（を）もろくもる云々と斯（も）待（み）る

金五ノ元七

浮世の中（の）思（ひ）と云々と思（ひ）侍（り）く云々

新洗の御（裏）所（を）拜（せ）と奉（ら）ん（と）と云々

山家集抄（曰）續（後）室（み）は返（と）りては（は）字（を）後（の）松山（の）水（の）海（で）能

保（の）林（と）つ所（あり）院（の）御（墓）近（と）所（あり）是（も）外（は）林（と）つ所（あり）今（ハ）乃

生（村）と書（は）たの字（のみ）字（のみ）又（保）と云々と音（通）乃（生）坂（と）返（も）乃

此地北（に）海（三）方（の）山（を）く列（せ）雲（の）如（し）撰（集）抄（の）文（を）符（合）たれ（と）云々

名産五加皮茶 白峯（を）製（し）其味善（し）

本草綱目五加其葉（作）蔬（食）去（皮）膚（風）濕（五）加（皮）根（皮）也（造）酒（用）根（皮）去

骨（莖）葉（亦）可（也）と云々

石文蛤（松浦）より出（る）殼（の）文（蛤）蛤（小）因（に）因（に）二（魂）の石（より）土（佐）の自（性）昔（弘）法

白牛山千手院國分寺 国分村あり平地より南面なり天湯八十丈の乳所あり

本尊 千手千眼觀世音菩薩 立像長一丈六尺弘法大師作 本堂南向開元六月十六日十七日兩日開扉あり

藥師堂 本堂の左の傍あり西面之 大師堂 藥師堂の左の傍あり 弘法大師と安良南向

毘沙門堂 大師堂の前より多門天王と安良 鐘樓 毘沙門堂の傍あり 古鐘あり

茶堂 授待所 東西ニテ所あり 大塔之趾 鐘樓の傍あり往古の礎石あり

金堂之趾 本堂の前蓮池の辺あり 蓮池 金堂の趾と本堂の間あり 石橋と架木あり

大樹之枯木 本堂の左ニあり木を以て作て 余木あり 君異多あり

二王門 金剛神の兩像と安良南の正面之 本坊門外の東傍あり

夫當寺ハ入皇四十五代聖武天皇の御宇天平九年詔一國二箇の指舎を
建之給之則ち行基菩薩勅命と奉つ諸及靈場とひつき給ふ所
の寺なり往古の佛客覺宇天正の厩火ニ燒亡一今其礎石若干

金五ノ卍八

存ぞり二王門の前ニ廣き池あり國の池に蓮華多くは清く之青遠く
愛に酒君より觀音の水供えを給ふ所と云

天正年間長曾我部元親四國を押領し時佛客僧舎靈像秘書を撰

て以て燒却せし如何なるか觀音堂に鐘樓の燒じり諸金

おと思ひ来給ふと拜せられ蓮華座の邊に觀音の給ふ諸人々を此

大像と人の盜と取とせし若男力の人あり夜中に負さるり又此像此

此國といひ給ひて此方世常ニ此行給ひて中んと論けり知人々を

此不昔より堂前蓮池あり其在中ニ每夜光物あり衆人思を怪しき誰

池中より其正体見届んやと云二人水練の達者あり心も別このはらう

我邊中の怪と物と云ん庵んく水底に降りて千手大悲の尊像なりこれ

有冠く思ひ南無大悲觀世音と唱へて米を軽く水上に浮せしを給ふ



蓮池
今朝
出たの
ふひひ
露菊女
拉の
曙中
蓮の
社亮

国分寺

人皇第四十五代

聖武天皇天平十三年

冷諸州馬經造七重塔

當寺も其時御建立あり

ウツ

則開基の行基菩薩

と聞ゆ



金五ノ元九

其時諸人歡喜、宝号と唱奉り、各池の中へ入り、俱引上本堂安置し奉る。命より、以末靈驗揚言せし、諸願成就せむと言ふこと、一抑言、縁れ池の中へ乱と遊給ふ事、如何なる善巧方便とあり、事と知り、めく、そ、實文奉申、因守伽藍、再身給ひ、本尊の大縁を、六轆轤を、壇上二巻上たてまつり、時、奉行役人番匠僧俗老若数百人、堂上へ並居、如何のま、ろ、大引上奉る、網とて、本尊忽ち倒し給ふ、程、諸人、跡まりぬ、其倒る、聲雷のひ、かく、堂中へ、暗夜、如く、一音唱へ、則ち尊像を打とぬ、諸人、佛天、根、尊像の、推け、大、殺され、と、延、承、尊像を、も、給、彼者も、も、損、此、合掌、有、南

無大悲観世音と唱へ、堂内の老若男女、思儀の、俱、涙と、異口同音、宝号と、其夜、諸人通夜、念、近、事、其座あり、人、存命、傳、堂前、火、拈、古、相傳、観音と、作、除、本、若、病、人、深、観音と、念、奉、此、本、割、腹、用、病、四、遍、禮、の、人、普、知、事、又、團、寺、の、鐘、龍、宮、供、養、言、傳、頃、奉、も、貝、売、の、著、病、と、念、奉、此、貝、売、と、取、扱、病、癒、今、皆、取、其、跡、の、慶、長、奉、申、大、守、生、駒、正、公、の、時、世、鐘、能、鳴、高、松、の、城、取、行、六、時、の、鐘、城、下、の、怪、異、疫、癘、流、行、止、時、た、れ、世、鐘、の、崇、々、と、忽、本、寺、大、守、と、姑、僧、侶、男、女

象頭山の天験
小太郎父の
誓と後



金五ノ四十一

もに國分寺の清く懺悔せしむ城下漸く静り夜癒も止る此清と寺
小送る来る時祝音往來し拾ひし種と荷ふ人と催促し拾ふと諸人の
心ももろや 以上祝音真應集出

當寺より白峯さふらる幸五十所坂あり是を國分坂とて山徑至つて現
なり俗に國分の裏坂と号し暑中ハ遍路の者も往てり

國分八幡宮 國分寺より十丁許東山の村中の生土神の社頭の番ハ後篇に出
傳之實永元年當國の侍士民谷源八掘源を左衛門守遺恨より乃ち當社北
馬場先におたふ及傷おふし民谷ふ運中々堀をたて討る其妻一子小太郎
敵と討えんと象頭山に祈誓とてさる靈験空しかり小を良切とて武術と好
御生後の尊儀とて乃ち同十七年の春先年父の討とて湯原の傍に於て首
尾よく敵と討あてしとて時小太郎年十七其子練凡さる編の神を擁

護の靈験なり故に世俗と金毘羅御利益の護誓と稱しわすの
人口を贈りて
護誓の流傳せんとて是と畧ん人曰右護誓の古
跡は社の西にありて大門を築き置るといふなり

吉水茶堂 吉井村あり不動庵とて白峯より根香寺より半途あり

遍禮 八十一番の礼所白峯寺より八十二番根香寺より昭路凡五十餘町

都々山経を南に河野郡新居村にありて余は人家に在りては足弱の遍禮

の輩も茶堂と建て行人を助く在り一箇の草屋とて之を往暮し徒を宿ら

しむ 舟女は八景堂の前より其末由と扱て祀せり

不動堂 本堂より並ぶ立像凡一丈餘の加持水 不動堂の前より
不動明王の木佛と安ん

足尾明神社 不動堂の右の傍の山上あり往來の諸人足の病を救ふを給ふとて鳥居あり
神鞋とつけ祈る者勿論仕建なる諸人も道中の勞とて祈り
て俱に草鞋をかきとて鳥居をかき祈りて

青峰山千手院根香寺 白峯より五十町山にあり八十二番の靈場なり本堂南面

本尊 千手觀世音菩薩 立像長三尺八寸 弘法大師作

不動堂 本堂の右隣に不動明王と安ん 大師堂 本堂の左の傍にあり 弘法大師と安ん

本坊 境内西の傍にあり 茶堂 石階の半途にあり 二王門 本堂の正面南に向ふ 金剛神の兩像と安ん

二王門額 青峯山 吳趙程赤城筆 時年七十有六あり

當寺は往昔弘法大師の草創なり千手觀音の像を作り堂と建て安置

給ふ其後智證大師より遊息し給ふ時より原此山に枯木あり其根香氣

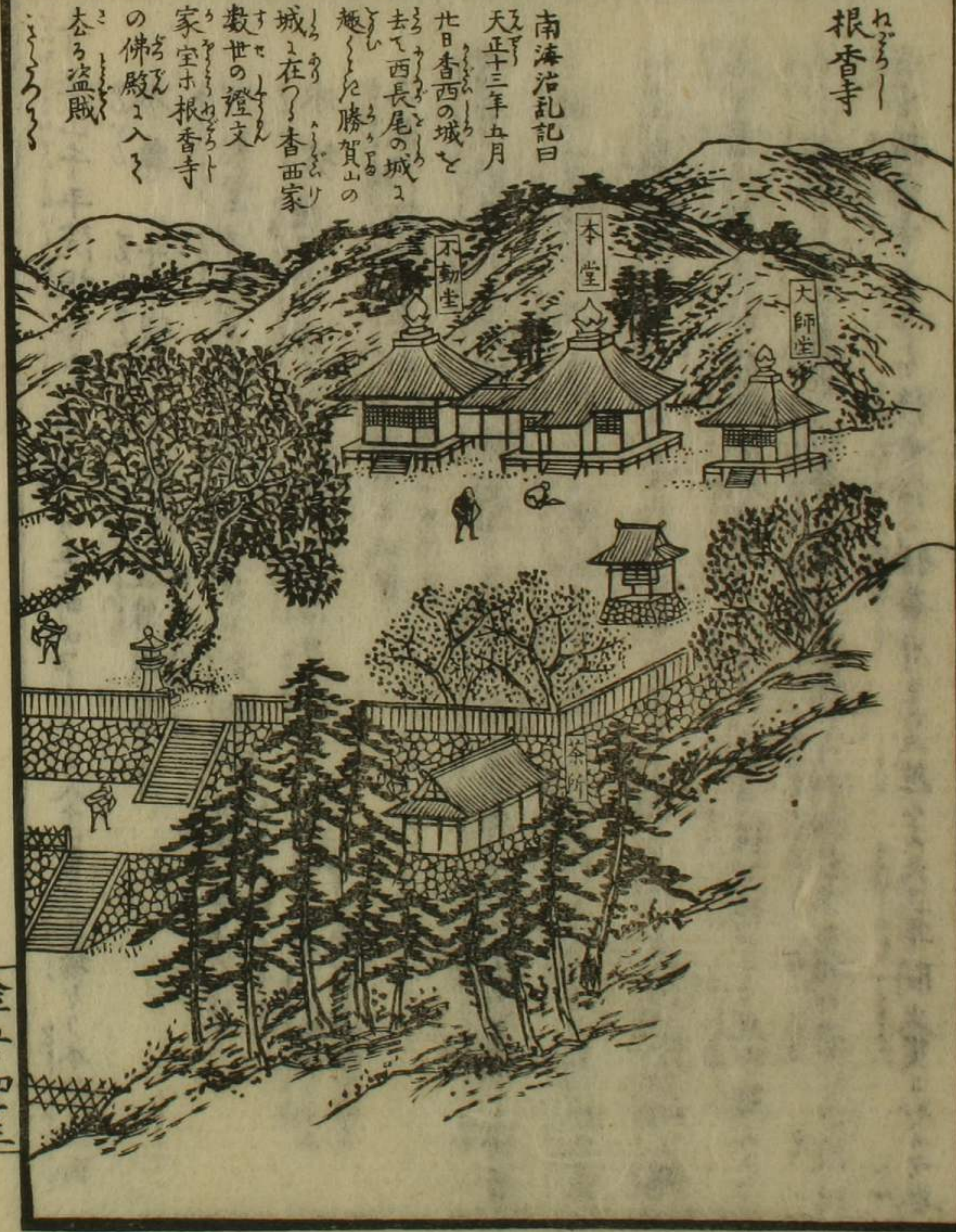
の遠く薫り薫り流し入る川水香しとて甚し故に香川と号す遂に郡

名と香川郡とて智證大師此木を以て千手大悲の像を作ると丸十幹なり

其一當寺に安ん其餘は白峯吉水等に安んり則此枯木の根の香し故に

寺と根香寺と号し後世俗に根香寺といふ然るに天正年間火災かると本

根香寺



南海治乱記曰
天正十三年五月
廿日香西の城と
去て西長尾の城と
趣くした勝賀山の
城に在つて香西家
数世の澄文
家室亦根香寺
の佛殿に入る
たる盜賊

金五ノ四十三



寺内のいふと
取んとせん
鎖と下
明と住僧も
強盗の難と忍
と下山
山中一人か盗
賊佛殿火と放
つて去る此時香西
家の燈文あり
本尊諸佛什物ホ
焼亡と世静つて後寺と
取立んととふ本尊なり是なり
南より半路より古寺なり是も弘法大師の
開地なり吉野の山と像なり無住といひ佛像なり
残なり是と根香寺より本尊と
今の観音ハ素吉水寺の観音なり

尊ごんおの諸佛しよぶつ像ざう經きやう卷まき什物じしつぶつ悉しつじゆく燒失やうしつと其後そのご再興さいきやうよよの時とき本尊ほんごんさ
 時とき當寺たうじと白峯はくほうの間ま吉水寺きちみづじと之これ私法しはふ大師だいし建立たうじやうの廢寺はいじは此本尊このほんごんハ
 往昔わうしき智證ちじやう大師だいしの作つくりし十髀じゆしの中なかにれ前像ぜんざう同佛どうぶつなるを以もつてこれと
 安置あんじし尚吉水寺しやうきちみづじの靈佛りやうぶつ靈室りやうしつホとも藏くらり漸しだ日ひ觀かん復ふと然しかふ又享保きやうほ
 年間ねんかん火災かさいかゝりて再またび靈室りやうしつ燒や七しち八はちと之これり本堂ほんだうの傍かたわらより東あづまと眺ながみ高松たかまつの
 鎮城ちんじやうより女木めぎ島しま男木おとぎ島しま小豆島こまぢうホ之これ渡わたりて絶景ぜつけいなり
 香西浦かうせい根香寺ねかうじより一里許いちりこほ東あづまより浦里うらり在家在家建たつとて賑にぎり東あづまの端はたより川がはり
 本津川ほんつがはより山川やまがはより其幅そのひろ廣ひろく板橋いたはしと架かす
 郷東川かうとうがは香西香東かうせいかうとうの境川さかいがはなり是こゝより東あづまと香川かうがは東あづまの郡ぐんなり又香東かうとうより金香東川かうこんかうとうがはは
 香西かうせいより廿丁にじやうぢやうより東あづまよりなり
 絃打山せんぢやうさん郷東川かうとうがはの東西かうとうせい濱村はまむらの向むかひ聳そびり俗ぞく卿東山しやうけいとうさんと云いふ
 弦歩せんぷの山やまより出でる月影げつえいは張はりて言いふ言いふくうりりれ
 梓あざみろくろくふ今日けふ日ひ立たてて弦打山せんぢやうさん霞かすみはあぢく
 細川道歎ほそがわみちなげ

金五ノ四十四

遊あそ綵さい濱はま

西濱せいひん村むらより三丁さんぢやう綵東さいとう北きたより今糸いまいとの濱はまより傳つたへ此こゝ地ちは平生へいせいよりゆかりなり
 故ゆかりより遊あそ綵さい糸いと春はるの陽炎やうえんより晴はる空そらの雲井くもいの根ねよりゆかりなり
 陽炎やうえん野馬やま花はな糸いとよりふかぢくさうこれバ詩うたなり天外てんがいの遊あそ綵さいはあり
 とやせ無なとやせと遊あそ綵さい繚亂りやうらんより碧羅せきらの天あまより古奇こきより春はるは
 空そらより又また古名琴こなごんの濱はまより遊あそ綵さいの事ことより是こゝ非ひと云いふ
 又此濱またこのはま遊あそ綵さいの社やしろより風集かぜあつなり
 重仁親王しげひとしんみ之の古墳こふん 高松たかまつの城下しろしたの西官せいくわん服村ふくむら匠しやう王山おうさん藥王寺りやくおうじの境内くわんないあり
 今廢いまはいし形かたちより石いしと小祠こほらに似にむ又此またこゝ前まへの塔たつたの形かたちなり石いしあり緒人しよじん頂痛ちやういたう此こゝ神かみ
 と補おぎなへ頭痛づういたうを腦のうを時とき藥くすり心こゝろより徳とくの形かたちなり此こゝ石いしに神かみの如ごとく結むすびて法はふ人にん
 平愈へいこせん事ことと祈いのりて靈れい験げんなり合あはせたりと云いふ是こゝ是こゝなり
 緒人しよじん平生へいせい向所かうじやうじよより傳つたへ重仁親王しげひとしんみの崇徳院しゆとくいん第一だいいちの官くわんなり御ご父ふ帝てい御ご練れん坂ばんより依より
 此國このくにに左遷させんし給たまふ然しかふ其御ご流りゆうと慕こぼれ給たまふ此國このくにに下くだらせ給たまふ平生へいせい世よの愛あいと
 おしひつひ給たまふ頭痛づういたうを腦のうに給たまふ後のち終つひに薨すせ給たまふ由よしより頂痛ちやういたうよりや
 る者ものに助け給たまふとの法はふ誓ちかひなりと云いふ
 王代わうだい一覽いちらん小新院こしんいんに出家しゆがし給たまふ
 續岐つづきの國くにに流ながし奉ほうり重仁親王しげひとしんみも出家しゆがす

又當寺本尊、藥師、彌勒、光如、未了、弘法大師の作と云

鷲田、莊之古城、高松の城下より南、西より一里半、今、辰田と云

建武年間、細川、郷、律、師、定、禪、と、楠、菴、の、院、間、香、西、と、し、属、を、入、故、高、松

三郎合戦、お、び、大、敗、を、去、依、追、味、方、属、は、る、其、勢、已、三、千

余、騎、お、び、近、き、日、京、都、攻、上、ら、ん、ど、勢、ひ、ら、と、高、松、三、郎、早、馬、と、云

系、終、入、道、下、了、大、平、記、云、云、云

金毘羅系諸名所圖會卷之五終

金毘四十五

